



光受寺通信

H.27年2月1日 発行
 発行者 光受寺
<http://koujyuji.com/>

私たちはどこに向かって歩んでいるの？あてもなく歩み続ける先には生命を持ったものの宿命としての「死」が待ち受けているだけだということに。病気への不安と、死への恐怖を感じながらも、やはり今日も漫然と生きている。それが私たちの現実の姿なのではないだろうか。

「後生の一大事」。今、まさにこのことを、明らかにしなければ、ただただ不安と恐怖の人生で終わってしまうのだ。帰る場所があるから旅行へ出かけても楽しいように、私たちはどこに還っていくのかを承知しなければならないのだ。還るべき世界がはっきりすればこそ、安心して今の人生を楽しめるということになるのだ。

たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏とふかくたのみまいらせて…と、白骨の「お文さん」にもあるように、切実な願いをもって私たちにはたらきかけてくださっている。目の前の現実をしっかり目を向け、ただただ仏さんの願いに耳を傾けていくのが、私たち真宗門徒の歩みなのではないだろうか。

春季永代経 三月二十一日(土)〇 講師 T・A 師

今年も早ひと月が過ぎ去りました。毎年同じ感慨に耽りながら老いを重ね、重ねしつゝ口を生かしてまいりませぬ。

さて永代経も間近となり、境内では梅の蕾も大きく膨らみ始めました。ぜひ多くの方に「参詣をいただけます」ことを心から願ってお待ちいたしております。



妻の死が教えてくれたこと

一ツ木 Y K

遠く離れて住んでいる友人知人は、妻の死をこちらから出した喪中ハガキで初めて知ることが多い。若くして逝った妻の訃報に大半の人は驚かれる。何があったの「口々びっくりしています」「天丈夫ですか」などのメールや電話が入ってくる。

一般的には喪中ハガキを受け取った場合「には、年賀状を出さないのが通例だが、寂しいしよつから出しますよ」と添え書きのある年賀状も届いた。

妻の死後、書店で一人暮らしに関する目が行くようになった。手にした本の一部は、老いの才覚「曾我綾子」、そのかもう君はいないのか「城山三郎」、若い型レスン「渡辺淳一」、おかげさまで生きる「矢作直樹」、男の総仕上げ「おとちよ」などです。

それらの中から拾った心に残ったフレーズを紹介します。

妻逝きて 会話と笑いが消えた今 いかにも生きるか じつと空を見る

妻がいてくれたら、みなてきばきとやってくれたに違いない。改めて思い出しておーいと呼びかけて相談したくなる。

夫婦とは 沈黙が平気でいられる間柄

・二人暮らしに夢がわくか 蛆 うじがわくか、その総仕上げには、まず一人暮らしの心構えが必要

奥さんを亡くしてどうですかと、聞かれることがある。その時私は 相方、パートナーを無くすというよりは、どうもい話ができる相手がなくなることですと「と答えるようにしている。

残念だった除夜の鐘

鎖が外れて…

今年は例年以上に多くの方にお越しいただけたようで、本堂も超満堂と言った感じでした。

しかしながら肝心の鐘つきが、撞き木を支える鎖が外れて途中で中止となりました。

本堂に申し訳なく
思っております。

その後、有志の方のご尽力による復元
することができました。ありがとうございました。



さすが寒いです

光受寺新年会開かれる。

1月10日(土)
午後5時半より

例年の定例行事となりつつある、**おでんでパーティー**が開かれました。
参加者は家族含めて十八名でした。お世話方は何日も前から素材の準備や下ごしらえをされて、おかげさまで楽しく、お過ごしくださいました。
何よりも心の交流があったか
かった。来年も
やります。ぜひ
ご参加を！



あるご門徒さんの死に思う

S T

1月、御門徒の83歳のおじいさんが亡くなられた。

おじいさんの御家庭では日常的に家族全員でお仏壇の前でお参りがされている。きっと、代々にわたってそうされてきたのだろう。

お通夜でも、家族全員、お孫さん達までもが、大きな声で正信偈を読んでいた。少し驚いたのは、他の数十人の参列者もつられる様にして大きな声で正信偈を読みはじめたことだ。その大合唱は、大きなホール全体に響き渡り、私の声がかき消されるほどだった。

おじいさんは、子供や孫達に多くのことを残していったのだろうが、この正信偈もまたおじいさんが大切に伝えていったことのひとつであろう。その大合唱は、まるで、おじいさんへの感謝の気持ちを精一杯の声にしているように思えた。

生前、おじいさんは、患いながらもお仏壇へお参りをしてくださっていた。

私がお常飯に行くと「わしは、もう十分に長生きさせてもらった」と口癖のように言ってクシャクシャの笑顔を私に向けてくれた。その死への不安を感じさせない笑顔や、阿弥陀如来への感謝の言葉から、私は真宗門徒としての生き様を教わった気がした。

きっと、おじいさんは阿弥陀如来の光に包まれて、正信偈の大合唱を嬉しく聞きながら浄土へと還っていかれたことだろう。御遺体に添えられた花束には、「ありがとう」の文字があった。

改めて、葬儀とは故人へ感謝を伝えるためのセレモニーなのだと思った。

合掌

「一緒に勤めをしませんか？」

本堂は毎日でも結構ですが、月に一度は皆さんと共に、朝のお勤めができたらと思います。

すでに一月から始めていますが、一月はお一人もお越しいただけませんでした。

時間が問題なのかなと思っていますが、毎月第二土曜日の七時半からにしておきます。

正信偈同朋奉賛でお勤めをいたします。短い話も致します。

時間があればお茶を飲みながら雑談に花を咲かせたいとも思っています。

光受寺婦人部結成の声も

光受寺という場をご縁として、ご門徒同士の結びつきができれば、また一つ世界が広がるように思えます。

まだ何も具体的ではありませんが、まじりによるこぼしご意見をいただきました。
奉仕活動が主となるとは思いますが、共に生きる喜びが見える場になることを願っています。

新聞原稿募集中です。